



## 1月のごあいさつ

平成20年1月16日

平成20年の新年にあたり、皆様にお慶びを申し上げます。

度重なる不祥事を経て、会計報告の発展がやっとその緒に就き始めた。

会計報告は、報告主体である企業の会計とその妥当性を証明する独立監査人の監査によって成り立っている。

そして、それらは「外的なもの」、「内的なもの」、「心的なもの」から構成されていると思う。

**「外的なもの」**とは、人間に例えれば、外見であり、服装や体型のようなものである。

1月11日（金）に、日本公認会計士協会沖縄会の新春研修会が開催され、協会本部の島田眞一調査企画局長から、国際会計基準に統一されつつある諸基準、連結情報の精緻化、金融商品取引法における投資ファンドの会計処理等の会計実務と監査事例の講義を受けて、会計及び監査の外形的な整備が進展しつつあることを感じた。

**「内的なもの」**とは、人間に例えれば、身体の健康を保持する機能、暴飲暴食を止める、危険なものを避ける、毒のようなものを食べないといったような健全な身体に組み込まれている自制作用である。外からは見えない企業の内部管理である。それは平成20年4月以降に始まる事業年度から、J-SOX法によって、公開企業に「財務報告に係る内部統制の評価」と、独立監査人に「内部統制の評価の監査」が義務づけられることによって、充実することが期待される。

2月15日（金）に監査法人トーマツの手塚仙夫さん（協会本部常務理事）に来ていただいて、沖縄事業再生研究会の勉強会で「J-SOX法」、内部統制実施基準について話をさせていただくことになっている。

「**心的なもの**」とは、人間に例えれば身体の問題ではなく、もっと根源的な人間の心の問題である。

1月12日（土）に、「沖縄知の風・金融人材育成講座」で、産業再生機構のCOOを勤められ、成功裡に昨年3月同社を清算終了された富山和彦先生の「地域経済支援と産業再生」の講義を聴いて、感銘するところが多かった。

経済事象は変化して止まるところがなく、会計は経済事象を映す鏡のようなものである。会計が経済事象を表面的に追っている限り、常に現実から遅れをとり、不祥事を防止したり、真実を報告することはできない。

心の問題、精神的な面こそ最重要で、最終的な課題であろう。

会計報告は、第一段階の「**外的なもの**」の改善を図りつつ、第二段階の「**内的なもの**」へと更なる充実へ踏み込もうとしている。

第三段階の「**心的なもの**」の段階は未だ先のことも知れないが、企業の経営者と独立監査人がより高いところを目指し、今後とも不祥事を克服して行く心構えを持ち、相互に努力を重ね、会計と監査を発展させて行くことが必要となろう。

